



第三回 日本海西部漁業

技術改良普及會議

一月十二、十三の両日、鳥取県東泊町松崎官、福井より山口にいたる各水産試験場長など出席のもとに開催された。今回の会議は從来行なわれてゐた漁業技術の改良ということよりも今後水産試験場の方向、ならびにありかたにたいする水産庁の考が説明されそれについての各水産試験場の意見の交換というものが主体となつた。おもな議事の内容は左記のとおりである。

### 議事内容

#### 一、手塚研二課長挨拶

沿岸漁業振興の方法についてふれ、これにはまず生産の維持が第一であり漁業技術のありかたとしては小手先の仕事であつてはいけない点、仕にたずさわつてゐる現場の人の熱心な努力と發言がなければとうていこの事業を遂行することは出来ない事が強調された。

#### 二、昭和卅一年度各水産試験場事業実施概要の説明

##### プリントにより各水産試験場担当技師より簡単な報告が行なわれた。

#### 三、水産庁より昭和卅三年度の予算説明

(一) 水産庁では從来実施されてきた先達の漁船式のものは今後は各県自身でまかなくなつてゆく方針ですすむ事が明にされ

一、手塚研二課長挨

沿岸漁業振興の方法についてふれこわれにはまず生産の維持が第一であり漁業技術のありかたとしては小手先の仕事であつてはいけない点、仕にたずさわっている現場の人の熱心な努力と発言がなければとうていこの事業を遂行することは出来ない事が強調された。

二、昭和卅一年度各水産試験場事業実施概要の説明  
プリントにより各水産試験場担当技師より簡単な報告が行なわれた。

昭和卅三年度の予算がまだ決定しないので予算に特に関係のある事は確  
ないという水産庁の言明もあつたの  
試ともその意志をくみ漁村研究グル  
育成強化を今後強力に推進する方針  
グループの現況活動状況を月一回は  
産庁に報告する、水研と水試間の研  
究をいつそう緊密化する方法などが検  
討された。予算に直接関係のあることは各  
プリントにもられてある。

現在水産試験場がおかれている状況を立場研究という立場よりみて今後水試はどのような方向に進んだらよいかまたそれにちする水産庁の考え方が説明された。すなわち現在の水産試験場は長い歴史を有するが旧態依然とした事業を継続して実施しており新しい時代に立脚した研究態勢といものに非常におくれている。これは水産試験場がおかれていた立場というのが非常に問題になつてくるが各水試で実施している事業が横の連携が全くといつてよいほどとれておらず同じ事を各個ばらばらに実施しているので非常に無駄が多い。各水試の研究テーマあるいは方向というものが非常にあいまいである。各水産試験場の研究レベル（研究者のレベルではない）が水研究、土

研究を行ふ必須の事項は、水木先導の流れ労務の研究である。このための調整にたいし各水産業関係者が、漁業、大羽イワ、コソクリ等は次のものとされたが水産業では次のも

一、漁況予報の実施  
二、大羽イワシ刺網漁法  
三、コンクリート魚礁ブ  
究

四、日本海西部海域におけるサンマの調査と利  
用関係

一、現在実施している利用担当者会議を充  
強化する。

二、アジの利用方法を積極的に推進する。  
増殖関係

一、ワカメ、イワノリの生物的方法をか  
つた増殖の研究。

二、養鰯に関する研究班をもうける。

機関関係

一、小型ジーゼル化を積極的に推進する。  
なお漁業、増殖関係では上記の研究テ  
マにたいしどのような事を具体的に実施す  
るかは十一月下旬浜田において会議をも  
のさい決定することになった。

第一〇回の全国蒲鉾品評会が去る十一月二十三日から二十六日まで名古屋市百貨店で開催された。

昭和三十一年度の全国水産練製品の生産高は九、〇〇〇万貫を越え全国総水揚高の二割内外の鮮魚が練製品として製造されてい  
る盛況を反映して出品点数も八〇〇点に達し、かつ高松宮、同妃両殿下も来臨されて

(三) 漁業先進地へ研究グループ漁民の派遣としてあらたに三〇〇万円が計上され、岸漁業の集約経営調査費として一、〇〇〇万円が計上された。

学関係に比して低いなどという事も大きくなる指摘できる。そのような事から今後はデータ別に研究テーマを作つて共同の研究を実施しこれには水研、大学、その他学識経験者も入つてもら、国からも補助金を出

漁撈、利用、増殖、機関の四部門にわかれそれぞれ各県の実施した状況について技術を中心に意見の交換がおこなわれた。



ば礁魚、洄游魚の別なく垣網の附近に魚が濃いことである。垣網に平行に延繩を下るし、マダイ、チヌ、カサゴ、ハタ、アナゴが平均してムラなく釣れ、垣網に結びつけた小舟で集魚燈の一本釣をやれば、驚くほど大型のメバルが十貫、十五貫と釣れる。垣に沿つて拡溝をすれば、ハマチが掛り、ズキも可能性がある。月夜の擬餌曳釣では、アホリイカが垣網から飛びつくる。このように、定置網の垣網、その保護区域は例外なく小釣漁業者の垂涎の好漁場となつてゐる。

魚の集まる原因は、陰影の嗜好とでもいつたらよいか、生物の生存の歴史のなかで、陰影を投射する障害物が、弱小被食害生物に及ぼして来た安全性といったようなものの生物的表現などという高遠な理屈から、解りやすいみた眼の現実では、影を作り材料に寄生している食餌生物（蠕虫類）に誘引されるのである。ハマチがクラゲ密集群の陰影に好んで潜り込んでいることは、前に書いたが、垣網の陰影にも好んで、自然状態では、陰影と餌との連鎖している場合が多いと考えられるので、魚が陰につく、いや餌料につくといつても、それは果てのない論議で終るから、魚は陰影と餌料のある場所に集まるとということにしよう。

魚が、陰影と餌料のある場所に集まるとして、蟹漬、定置垣網等、現実に成功している集魚構造物の設置様式が問題となる。成功している集魚構造物は、海底から海面へ向つて浮上懸垂している物体である。

現に指導実行されつつ、水産的に大して成功しているとも思えない古船石積み、コンクリートブロック等集魚構造物は、構造物それ自身が、海底に密着し、重量をもつて沈下の速度を速めていることに気付く。集魚構造物の設置を、浮上懸垂式と沈下式の二方式に類型化して考えると、漂砂地帯での沈下集積式は、丸ビル位の巨大構造物を入れるなら別として、早晚漂砂に埋没する宿命的不利を持つていて、漂流する。

魚を、海中に懸垂している構造物や、その集団的陰影・餌料発生環境の造成で集魚出来るとして、海底の人工礁を造ることにそれほど執着する必要はない。浮上懸垂式は、漂砂の埋没から絶縁した海の中層に設定され、構造物自身、ナイロン等の科学纖維を選べば、材料的には、もはや永久纖維による永久構造物たり得る。その先端に耐圧ボリエチレン浮子尺玉でもつければ、耐圧耐埋没のオール科学構造が、電話一本で明日にも出来る。

スプリングラーが砂上に開花し、ポリエレン人工林が、海底から無数の平行直線を描いている超近代的景観を談つて、真昼間、漂砂克服の夢をみた。

## 編集後記

この連絡ニュースも皆様方の御尽力によつて八二号を裏ねることになりました。明年からは、編集者の数も充実して、新しい様式のもとに充実した内容を盛つて出発したいと存じておりますので、御期待を願い上げます。

今年の後半は、皆様方が五ヵ年も続いて調査された暖流調査の結果の詳細を取纏められ、それが出版される運びとなつたことは、関係者として慶賀に堪えないところであります。それにつきましても、右の取纏めの結果から、裏日本における水産の現状を篤と把握された事と存じますが、それをもとにした色々の問題をこの紙上に展開して頂きたいものであります。

(編集係)

試みに浮上懸垂式が砂底の広漠たる漂砂地帯に成功したと仮定しよう。区画された海底から中層に浮上している無数の水中アドバルーンを、「懸垂集魚林」と呼んでみるのも悪くない。

懸垂集魚林の基礎は、漂砂の埋没に適した型のコンクリートブロックで据えられ、これ

に大夫なナイロン纖維（太い三子綱）繫留綱をつけ、海底から三分の二位の中層範囲で、浮子球と結び、 $5m^2$ に一点づつ $2000m^2$ の面積に基盤目に設置したら、四〇〇個のボリエチレン浮球が、海底から平行斜立ちで、浮子球となる。この陰影に魚がつかぬことがあるだろうか。

◎ 十二月五日、参議員松浦清一、衆議員佐々木良作両議士は香住支所を訪れ、点、器具類一〇点、写真五〇点、入室者は二万人を越え盛況であつた。

◎ 十二月五日、参議員松浦清一、衆議員佐々木良作両議士は香住支所を訪れ、所員と種々懇談した。

